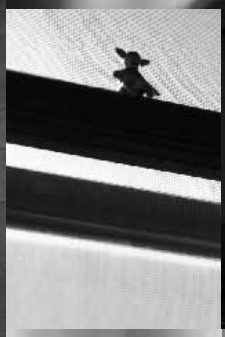

本展は、国登録有形文化財旧マッケンジー邸と“HOMAM”を私たちに遺したダンカンとエミリーのおもいを、現代美術展により再考し、継承しようという初めての試みであった。静岡市の委託を受けて静岡市文化振興財団が制作、静岡アートギャラリーが企画協力をした。開催趣旨に理解と賛同した、地元にゆかりのある20代～50代の現代作家9名の協力を得て実現した。「我が家で展覧会を開きます。」をテーマに、作家自ら旧マッケンジー邸に足を運び、展示イメージを膨らませながら作品プランが練られた。また、作家自らの展示作業により作品は完成された。

カラーページ中央には邸宅の図面を配し、作品の展示された場所と動線番号を記した。掲載写真は、作品および展示の場所、方法、そこに内包されたもの、が記録されているものを作家と一緒に選別した。コメントは、記録の媒体をふまえ、作家が必要に応じて記した。

会期中展覧会に訪れた美術評論家の椹木野衣氏は『見聞録』の中にこのように記している。「展示はどれも工夫が凝らされているが、共通しているのは透明な叙情感ともいうべきもので、各自まったくバラバラの個性ながら、歩いているうちに不思議と統一感が浮かび上がってくるのである。」

旧マッケンジー邸において、現代作家の表現活動と、ダンカンとエミリーのおもいが結晶し、サイトスペシフィックな展示の作品たちが誕生した。窓に差し込む光りや外に広がる青い海、訪れた人々と共に“HOMAM”に流れる時間（歴史）の中に実在した。これは、本展のためにつくられた作品たちと、展覧会の情緒纏綿な側面を記録するものである。

静岡アートギャラリー　学芸員　蜂谷未緒